国語

（解答番号 1 ～ 35）

第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　50）

演劇が演劇として雄弁であるのは、役者が舞台上で思わずトチル(注1)瞬間であると、かつて度々いわれてきた。これは、あながちばかばかしい意見とは思えない。その時、一瞬、演劇は非演劇的なるものと交叉（こうさ）し、演劇という装置そのものが対象化されるからである。

もちろん「演劇」もしくは「お芝居」といわれるものが、非演劇的なるもの、つまり「実生活」といわれているものから、確固たる距離を(ア)ヘダてて一つの緊張状態を保ち得ていた時代においては、そんなことはなかった。「演劇」は、「実生活」と呼ばれる安定して不動なる大地からの A飛翔（ひしょう）力のみが試されたのであり、舞台における役者のトチリは、その失速を物語るものに他（ほか）ならなかったからである。

しかしその後、「実生活」であるところの「実」と呼ばれるものの根拠が疑われ始めた時、事情は大きく変わったのである。「演劇」の飛翔力を確かめるための前提であった「実生活」が、その安定性を失ったとすれば、当然「演劇」も「実生活」も、それぞれに主であり従であることをやめて、これはあれでなく、あれはこれでないという、単なる関係に過ぎなくなる。「演劇」と「実生活」との間に(イ)カイザイした健康な緊張状態は失われ、それぞれが顔つき合わせてそれぞれを疑い始めたのだといえよう。

近代演劇の写実(注2)主義の手法は、「実生活」の確固たる手ざわりに依拠して「演劇」を疑うべく用意されたのだと一般にいわれているが、むしろ、我々が「実生活」の確固たる手ざわりを見失ったからこそ、「演劇」を通じてそれを対象化すべく用意された手法でもあったのである。つまり B「演劇」に依拠して「実生活」を疑うための手法なのである。もちろん、写実主義そのものに問題があったのではない。そうした手法を導入して、「演劇」が「実生活」を、「実生活」が「演劇」を、それぞれに疑わざるを得なくなった、「演劇」と「実生活」との関係の変化が問題なのである。

恐らく、役者がトチルことによってのみ演劇が演劇として対象化できた時代、というのはこの頃（ころ）のことである。その飛翔力によって演劇が測れないとすれば、我々はその演劇が、非演劇的なるもの（この頃実生活とは、非演劇的なるものに過ぎなかった

だろう)と交叉する瞬間に、それを垣間見る他ないからである。無意識的に「演劇」であり「実生活」である時代は終わり「演劇とは何か?」「実生活とは何か?」という問いを、「演劇」と「非演劇的なるもの」、「実生活」と「非実生活的なるもの」との関わりにおいて、それぞれ確かめなければならなくなった。つまり本質的なものは、「演劇」にも「実生活」にもないのであり、強いていえばそれは、それでもなくこれでもなく、同時にそれでありこれであるものの中、つまりそのそれぞれの「関係」の中に見出さなければならなくなったのである。

舞台上において役者がトチルということは、いうまでもなく「演劇」から逸脱することであるが、「演劇」的緊張感から解放されて白紙に(ウ)カンゲンされるのではない。つまり「実生活」に戻ることを約束されるのではないのだ。その役者にしてみれば「演劇」でもなく「実生活」でもない奇妙な虚空に立たされるのであり、その緊張感は、「演劇」的緊張感をしのいで余りある。従ってこそ観客はそこに「実生活」でも「演劇」でもないもの、そうした暗黙の了解を超えた或る本質的なものを垣間見るのである。

このトチルことによってはからずも生じた奇妙な緊張感とは一体何だろうか。「実生活」に本質があった時代の「演劇」のための飛翔力がプラスのものであったとするなら、それはマイナスの飛翔力とでもいうのだろうか。ともかくも、この奇妙な緊張感を利用し、そこにC「演劇」的虚飾にも「実生活」的虚飾にもまどわされない人間の実存を見出そうとしたのが、俗にいうアンチテアトル(注3)の手法であると、私は考えている。

もちろん、役者は目的的にトチルことはできないし、それを持続するわけにもいかない。しかし、それに近づくことはできるのであり、そのトチリへ至る過程の近似値を(エ)キザみ続ける事はできるのである。例えば、こういう例がある。

先ず最初に、舞台上に一つのポストがおかれ、役者が一人登場し、ポストを指示し、目は観客に向け、「これはポストです」という。この場合は極めて明解である。観客は役者の目に出遇ってそれとの同一地平に立たされ、言葉に導かれ指にさして示されたポストであるものに関心を持つ。ここには、演劇的なるものと非演劇的なるものとの間に、何等屈折がないから、言葉通り、流通する。次に、舞台上にはやはり一つのポストがおいてあり、役者が今度は二人登場する。一人の役者がポストを指示し、もう一人の役者の目を見て、「これはポストです」という。この場合の事情は、かなり複雑である。いうまでもなく、観客と役者は

同一地平には立っていない。「ポストです」といった役者と、それを聞いた役者が同一地平にあるのであり、言葉は前者から後者へ流通するのであり、観客はそれを(オ)ソクメンから聞き取るのである。ここでの観客の主要な関心は、恐らくポストには向かわない。むしろ、前者をして「ポストです」といわしめたその場の事情に向かうのであり、「ポストです」という言葉は、その事情を解読するための一つの手がかりに過ぎなくなる。演劇的なるものと非演劇的なるものとの間には屈折した空間が存在し、言葉が言葉として、物が物として流通することはなくなる。「これはポストです」という言葉も確固たる物としてのポストも、それ自体としては、演劇的であり非演劇的であることを問わずに浸透力を持っていても、その場では、その場の事情を解読するための一つの手がかりに過ぎないものになってしまうからである。ただ、「これはポストです」といった時に、ポストがその指のさし示す所になかった時、一瞬、その言葉は宙に迷い、ポストもまた宙に迷う。観客の関心のまとであった「その場の事情」にもうひとつ別の事情が交叉し、言葉は言葉として、ポストはポストとして、或る奇妙な生々しい実体を表すのである。

そこで、第三にしなければいけないことはほぼ決まっている。ポストがひとつおかれ、役者が一人現れ、ポストを指示さず、誰(だれ)をも見ることなく、「これがポストです」というのである。この場合の観客の主たる関心は、役者と観客が果たして同一地平にいるのかいないのか、地平を違(たが)えているのならば、どのようにして違えているのか、という点に集中する筈(はず)である。その不安が持続されなければならない。**D** その不安の中でこそ、あらゆる地平を通じて浸透力を持つ「これはポストです」という言葉と、ポストである「物」が、確実な手ごたえをもって、せまってくる筈だからである。極(ご)くつまらない例にすぎないが、ここに、アンチテアトルといわれるものの演劇性を確かめる最初のものがある、と私は考えるのである。

(別役実『言葉への戦術』による)

(注) 1 トチル ―― 台詞(せりふ)やしぐさをまちがえるなど、俳優が舞台でしくじること。
2 写実主義 ―― リアリズム。現実を美化したり理想化したりせず、ありのままに描き出すべきだとする考え方。
3 アンチテアトル ―― 第二次世界大戦後フランスで提唱された前衛的演劇。

問1　傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア)　ヘダてて　1

① カクシキを重んじる
② エンカク地に赴任する
③ 問題のカクシンを突く
④ 選挙制度をカイカクする
⑤ 去年のデータとヒカクする

(イ)　カイザイ　2

① 農地をカイリョウする
② 不動産売買のチュウカイ
③ カイカツな性格
④ 過去をカイソウする
⑤ カイケイを受け持つ

(ウ)　カンゲン　3

① ヤッカンに同意する
② 伯父は今年カンレキを迎える
③ カンセイな住宅街に住む
④ 首尾イッカンした意見
⑤ 生活カンキョウを整える

(エ)　キザみ　4

① 逆境をコクフクする
② 稲をダッコクする
③ 投票日をコクジする
④ 約束のコクゲンが迫る
⑤ ゴヒャッコク取りの武士

(オ)　ソクメン　5

① 提出書類をサイソクする
② ソクザに答える
③ キソクを尊重する
④ 道路のソクリョウを行う
⑤ ビルのソクヘキを補強する

問2　傍線部A「飛翔力」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「実生活」の揺るぎなさから離れて、それとは別次元の虚構の世界に観客を引き込む力。
② 「実生活」と「お芝居」の間にある緊張関係を利用し、両者を融合した舞台空間を一気に作り出す力。
③ 「実生活」における秩序感覚や道徳意識を刺激して、より理想的な高みへと導く力。
④ 「実生活」の安定性を不動のものと信じている観客の心を揺るがし、その思い込みを打破する力。
⑤ 「実生活」と瞬間的に交叉するような見事な演技で、演劇とは何かという高次の問題を意識させる力。

問3　傍線部B「『演劇』に依拠して『実生活』を疑う」とは、どのような状況をさすのか。その具体的な例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 時代劇ではしばしば民衆を虐げる悪代官が登場するが、最後には必ず善玉によって悪は懲らしめられる。そういう劇を見るにつけ、現実の世界では常に善が勝つとは限らないのではないかと思う。

② 夕陽の沈む静かな海岸で恋人に別れを告げる主人公の演技を見た。実際はもっと感情が高ぶるに違いないと思ったとたん、役者の演技の巧拙が気になりだした。

③ 緊迫したドラマの一場面で、役者がいきなり「これからどうなると思いますか」と観客に語りかけた。すると、舞台で演じられていた悲劇が作り物にすぎないように思えてきた。

④ 大家族がにぎやかに食卓につく場面で、父親が一家の主としていかにも威厳ある態度で振る舞っていた。舞台を見終わって我が家に帰ったとき、父親とは何なのかと考えさせられた。

⑤ 本来なら大笑いするような演技が予想される場面で、ベテラン俳優がわずかにほほえむだけで絶妙の効果を上げるのを見た。そこで、ふだんの生活でもこの俳優はこういう笑顔をするのかと思った。

問4　傍線部C「『演劇』的虚飾にも『実生活』的虚飾にもまどわされない」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 演劇的に誇張されたせりふにも日常会話を写し取ったせりふにも懐疑的であること。
② 演劇における装飾的な演技とも実生活における偽善的振る舞いとも無縁でいること。
③ 演技に不可欠な自己顕示欲や実生活に伴う虚栄心から解き放たれていること。
④ 舞台の華麗さにも俳優らしい優雅な生き方にも感化されず、生活者の論理に従っていること。
⑤ 演劇を支える秩序にも実生活を統括する論理にも組み込まれないでいること。

問5　傍線部D「その不安の中でこそ、あらゆる地平を通じて浸透力を持つ『これはポストです』という言葉と、ポストである『物』が、確実な手ごたえをもって、せまってくる筈」とあるが、なぜそのように言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 役者の失敗が今後どのような混乱を生むか分からない不安な状況の中でこそ、観客は舞台上の言葉やその言葉が指し示す対象物の現実感をより重々しく受け止めるようになるから。

② 舞台に上がっている役者が観客である自分に話しかけているという緊張感が持続することで初めて、観客は舞台上で展開されているドラマの状況を受け入れることができるから。

③ 観客が役者や対象物とどう向かい合うべきか分からなくなって初めて、発せられた言葉とその言葉が示す対象物を強く意識させられ、それらの実体がより鮮明に浮かび上がってくるから。

④ 舞台上の展開が予想不可能な状況に置かれて初めて、観客は一つ一つの言葉の本来的な意味やその対象物本来の機能についてみずから真剣に考えざるを得ないから。

⑤ 舞台を見る観客は、道具や登場人物が少なければ少ないほど、その乏しさによって想像力を刺激され、どのような演劇の場面にも通じるような言葉や物の力を実感するから。

問6　本文の論の進め方の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

① 舞台における役者のトチリの意味が変化してきた事情を、演劇と実生活との関係の歴史的推移の問題にからめて説明し、トチリによって生じる奇妙な緊張感とアンチテアトルの発想を関連づける。そして、その演劇の方法論を、ポストと役者という単純化された舞台を例にして段階的に述べている。

② 演劇と実生活の関係に着目しながら近代演劇の特質を説明した上で、両者のへだたりのためにトチリが生じやすいという問題を取り上げ、それがかえって演劇の新しい可能性に通じるのだという逆説を提示する。そして、ポストと役者という最小限の要素からなる舞台を例にして、新しい考え方としてのアンチテアトルの方法論を段階的に説明している。

③ 演劇と実生活が対極的に存在していた時代の演劇の限界を役者のトチリを例として説明する。そして、演劇と実生活とのあるべき関係を追究するアンチテアトルの方法を、役者とポストと観客の関係性の段階的なあり方になぞらえ、それらの具体的なイメージを活用しながら三段論法の巧みな説明を展開している。

④ 舞台における役者のトチリの問題を例にしながら、演劇の雄弁性について説明した上で、実生活に近接した演劇を目指してきた近代演劇の歴史に言及して、真実を追求しようとする写実主義の由来を明らかにする。そして、その理想を実現しうる演劇としてのアンチテアトルの発想を、ポストをめぐる段階的な対話を例として説明している。

⑤ 演じる対象を実生活に置くようになるに至った近代演劇の歴史を、トチリをめぐるエピソードによって描き出しながら、演劇に依拠して実生活を疑う手法としてのトチリの可能性に言及する。そして、次にポストと役者の関係を例にして舞台での言葉の機能の変容を段階的に説明することで、アンチテアトルの方法論を説いている。

第2問　次の文章は、松村栄子の小説「僕はかぐや姫」の一節である。千田裕生と辻倉尚子は女子高校の同級生である。彼女たちは二人とも文芸部員で、自分のことを「僕」と呼んでいた。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　50）

ぼくに与えられた
ぼくの一日を
ぼくが生きるのを
ぼくは拒む

尚子の書いたそんな一節が、裕生を振り向かせたのは一年生の晩夏だった。それまで彼女たちは同じ部に属しながら、先輩たちの膨大な知識や醒めた思想、おとなびた物言い、それでいてちょっと子供っぽい感傷に魅了され振り回されて互いに見つめ合うことさえしなかった。

けれども、十六歳の世をすねたような少女には、先輩のおとなびた言葉よりはずっと尚子の言葉の方が(ア)身の丈に合っていた。裕生は尚子の言葉に注意を払うようになった。

その冬に批評会をかねた合宿が行われた。予定をこなしたあとの雑談は文学談義になるのが常だった。その日も各自がてんでばらばらに好きな作家、好きな作品をあげて語り始めていた。先輩の誰かが与謝野晶子だと言い、誰かが西脇順三郎だと言った。十数名の部員がいた。太宰が上がり、三島が上がり、ヘッセもカミュもワイルドも上がった。

尚子が何と言ったのか裕生は思い出せない。尚子は終始うつむいて、眠ってるのではないかと思うような態度で（一年生にしては少しふてぶてしかったかもしれない）耳を傾けていた。尚子が促されて何かを言ったとき、**A**ああ、やっぱりそうだ、と妙に納得したことだけを覚えている。

裕生は何と言ったのだったか……裕生が尋ねられたときには、すでに彼女の知る作家たちはあらかた出し尽くされていて、戸

惑って……〈かぐやひめ〉だと彼女は言った。

「竹取物語？」

「いいえ、〈かぐやひめ〉の絵本です。朝倉摂の挿絵のある紫の表紙の。幼稚園の頃、僕はどうしてもそれが欲しくて……」

皆と似たりよったりの答えをするのが嫌だったのかもしれない、インテリぶるのが気恥ずかしかったのかもしれない、とにかくその絵本がどのように美しかったか、三年目の秋には去らなければならないかぐや姫の運命がどのように自分を胸苦しくさせたかを裕生が居直って話し始めたとき、尚子は顔を上げて裕生を見た。

ふたりは語り始めた。どちらも積極的に人に近づいていく性格ではなかったから、会話は弾まず、(イ)おずおずとした調子のもので、機会もそう多くはなかった。たまたま部室でふたりきりになったとき、あるいは、部員をまじえて談笑している中でさりげなく語った。普通ならば二、三時間で済むような内容をほぼ一年かけて語り合ったのだとも言える。

どちらも語るよりは聞きたがり、それでいて心のどこかでは耳をふさごうとしていた。それを隠すようにことさら無邪気になろうとして失敗した。

「〈二十億光年の孤独〉を読んだ？」

「……うん。泣いた、僕」

「キルケゴール が……もちろん、読んだって半分もわからないんだけど……本を開いただけで苦しくなって……」

「〈死に至る病〉〈わたしにとっての真理〉……僕らをひとことで殺す文句だ」

少なくともあの頃、裕生と尚子は似た者どうしだった。自分を溶かし出してしまうような光を恐れ、寧ろ輪郭をはっきりと描き出す影や、いっそのこと存在をかくまってくれる闇を愛し、晴天の日よりは雨の日の方が機嫌がよかった。十代半ばにして生を疎み、白雪姫やシンデレラよりは B 月に帰るかぐや姫に心を打たれた。可哀想だと思ったのではなく、羨ましかったのだ。

自分を取り巻いている存在や思惑がうっとうしくてたまらず、媚びない程度の微笑を愛用することで友人どうしの馴れ合いからも反目からも器用に身を遠ざけていた。誰にも何も期待してはいけないと自ら戒め、相手の横暴は許しても、わかったような

同情やいたわりには必ず冷笑で(ウ)一矢を報いずにはいなかった。

その実、心の中では自分にないものばかりを数え上げ、こんなにマイナス勘定の多い自分なら、いっそいない方が理にかなうと思い詰めて逃げ場所を捜していた。

誰にもそんな自分の思いがわかるわけはないとかたくなに思い込み、自らの内面を隠蔽に隠蔽を重ねて隠しながら、でもほんとうはかくも心弱き者なのだと叫ぶために言葉を書き連ねるという矛盾を犯していた。どうにもやりきれない感傷と怠惰をもてあまし、もてあそび、真摯であって不真面目だった。

そんな者どうしが友情を結び合えるものだろうか。孤立を気取り、解釈されるのを何よりの屈辱と感ずる者たちが、もし双子のように似ていたとしたらそれはあり得ないだろう。だから彼女たちは理解よりも無理解を、寧ろ何かしら意見の対立を求めて呟き合い、はかばかしい結果を得ず、そしてある日ふと黙り込んだ。

ふたりの間には一冊の詩集があり、ひとつのセンテンスがあった。

――夢は、たったひとつの夢は生まれなかったらという夢だから、贈られるのは嬉しいだろう。

その言葉は裕生の胸の中で、硝子の触れ合うような音を響かせた。透明できらびやかで、それでいて脆く哀しい響きだった。徐々に音は高まり、胸を裂いていった。

状況が許せば裕生は泣きたかった。胸の震えとでもいうものに身を委ね、切ない死の夢に呑まれて泣きたかった。けれどそうはさせないもうひとつの魂が、同じように今まさにこの夢に呑まれようとし、けれど自分の不在を夢みるのならまずその抹消を試みるべきではないかと自ら問いかけ、相手がそれを指摘しないはずがないと息を呑んで夢の前に立ちすくむ尚子の魂がそこにあった。

C ふたりは、ふたりであるがために身をこわばらせて黙り込んだ。目を逸し合いながら、互いの胸がヒクヒクと震える音を聞いていた。その震えの中に、ありがちな自己陶酔のうねりと、高潔な魂を気取る虚飾の顫動(注4)とを同時に認めていた。より多く哀しめることを誇るような、より傷つきやすいことを言い訳にするような、まるで転んだだけで大声をあげて泣き叫びおとなの

庇護を要求する幼児のような浅ましさを相手の中に、そして自分の中に見いだした。

彼女たちは素直に感傷に浸れなかったことで互いの存在を憎んだ。憎みつつ、そこに転がったふたつの魂がなんと弱々しく、澄んだ感傷に包まれて蛙の卵のように見え透いているのだろうと知ってゾッとした。

この日、裕生も、おそらく尚子も、取り繕うのはおまえの役目だと言わんばかりの沈黙にどっぷりつかりながら、自分たちが平凡きわまりないひとりの餓鬼だと思い知らないわけにはいかなかった。

あれから裕生は〈僕〉を気取る自分の心情について考え始めた。もっと純粋でもっと硬くもっと毅然とした固有の一人称がほしいと思った。魂を、透けて見えても恥じない水晶のようにしたいと願った。

尚子の方は部会に出てこなくなり、会えばからからと空虚に笑うようになった。尚子の魂はくぐもったベールに包まれ、三年になって同じクラスになってみると、**D**いつしか彼女は〈あたし〉という一人称を身につけていた。

「言ってやればよかったのに、センダじゃなくてチダです。ユミじゃなくてヒロミですって」

机の縁をつかむ佳奈の腕には男物の時計がぶら下がっていた。恋人どうしで時計を交換するのが流行っているらしい。

「名前、間違われるのって一番腹立たない？」

「慣れてるから……」

太い銀色のバンドがルーズに掌の方まで落ちているのを眺めながら、裕生は言った。

「なるほど」

佳奈が手首を上げると、ジャラリと音がして今度は時計が肘の方まで移動した。何時だろう、と裕生は身を捻ってそれを覗き込む。

「自分だって忘れちゃうことあるんだよ、名前。先生が間違えたって仕方ないよ」

佳奈は肩をすくめ、すくめたついでに揉みほぐしながら、教室移動を促した。

センダだろうがチダだろうが、ユミだろうがヒロミだろうが、どうせ自分でつけた名前ではないと裕生は思う。自分だったら……自分だったら、名などつけないだろう。こんな何もないようなものに名などつけようもない。〈千田裕生〉という名は、まるで空の鞄のようだ。持って歩けば言い訳は立つが中身はない、そんな気がする。

E 多分そんなとき、裕生は〈僕〉に、より同化するのだろう。〈僕〉と書くとき、それは、ひとつの目、千田裕生の肉体やうっとうしい思惑を離れたひとつの魂の視点だった。透明な視点。何者でもない僕。

女らしくするのが嫌だった。優等生らしくするのが嫌だった。人間らしくするのも嫌だった。どれも自分を間違って塗りつぶす、そう感じたのはいつ頃だったろう。器用にこなしていた〈らしさ〉のすべてが疎ましくなって、すべてを濾過するように〈僕〉になり、そうしたらひどく解放された気がした。女子高に来ると他にも〈僕〉たちはいっぱいいて、裕生はのびのびと〈僕〉であることができた。

要するに否定と拒絶からなる〈僕〉は、のびやかで透明だったけれど、虚ろに弱々しくもあった。

（注）
1 インテリ――知識層。インテリゲンチアの略。
2 二十億光年の孤独――谷川俊太郎の詩集名。詩集中に同名の詩もある。
3 キルケゴール――デンマークの思想家（一八一三～一八五五）。〈死に至る病〉や〈わたしにとっての真理〉はキルケゴールの言葉である。
4 顫動――ふるえ動くこと。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 13 。

(ア)　身の丈に合っていた　11

① 自分にとってふさわしかった
② 自分にとって魅力的だった
③ 自分にとって都合がよかった
④ 自分にとって親しみが持てた
⑤ 自分にとって興味深かった

(イ)　おずおずとした調子　12

① 気まずい感じ
② しらける感じ
③ ためらう感じ
④ かたくなな感じ
⑤ つまらない感じ

(ウ)　一矢を報いずには　13

① 無視せずには
② からかわずには
③ ごまかさずには
④ 嘆息せずには
⑤ 反撃せずには

問2　傍線部A「ああ、やっぱりそうだ、と妙に納得した」とあるが、裕生はどのように納得したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14 。

① 裕生は、尚子が他人に媚びたり安易に同調したりせず、自分の感性や意思を大事にする人だと納得した。

② 裕生は、尚子が他人とは異なる知的で大人びた物言いをし、現実的で醒めた思想を持つ人だと納得した。

③ 裕生は、尚子が他人の模倣をしたり周りの人と協調したりせず、天衣無縫で自由な人だと納得した。

④ 裕生は、尚子が他人の知識に影響されず、批判的で冷静な態度を崩さない超然とした人だと納得した。

⑤ 裕生は、尚子が他人とのつきあいを極力避けて、孤独に過ごす時間を好む思慮深い人だと納得した。

問3　傍線部B「月に帰るかぐや姫に心を打たれた」とあるが、どういうところに心を打たれたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① かぐや姫が、人間界で育ての親や多くの人々に愛されたことに感謝しながら、生まれ故郷である月に帰ることができたところ。

② かぐや姫が、人間界で多くの立派な地位の人たちに求婚されながらも、最後まで孤独を貫いて月に帰ることができたところ。

③ かぐや姫が、人間界における富や名声に未練を感じることもなく、魂の純粋さを保ったままで月に帰ることができたところ。

④ かぐや姫が、人間界のしきたりや煩わしい人間関係から離れて、ひとり自分の居場所である月に帰ることができたところ。

⑤ かぐや姫が、人間界では美貌（びぼう）のみが賞賛されることに違和感を覚え、人間界とは価値観の異なる月に帰ることができたところ。

問4　傍線部C「ふたりは、ふたりであるがために身をこわばらせて黙り込んだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 裕生と尚子は二人とも同じ傾向の文学作品に興味を持っているものの、お互いに相手の考えや感じ方がわかりすぎるため、自由に意見を交わすことができなくなってしまったから。

② 裕生と尚子は二人とも自己の不在を夢みていたが、生からの逃避が実現できないことだとお互いにわかったため、それ以上夢について語り合うことができなくなってしまったから。

③ 裕生と尚子は二人とも相手の感性に共感を抱き合っているものの、結局はお互いにすべてを了解し得ないことが明白になったため、自分の気持ちを語ることができなくなってしまったから。

④ 裕生と尚子は二人とも高潔で繊細すぎるという似通った性格であり、お互いに傷つけ合うことを恐れたため、自分の気持ちを素直に伝えることができなくなってしまったから。

⑤ 裕生と尚子は二人とも生に対して同じ思いを抱いており、お互いに考えの甘さを見透かされていると感じたため、自分の感情をそのまま表現することができなくなってしまったから。

問5　傍線部D「いつしか彼女は〈あたし〉という一人称を身につけていた」・E「多分そんなとき、裕生は〈僕〉に、より同化するのだろう」とあるが、〈あたし〉と〈僕〉の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 〈あたし〉は私的な場で女性らしさを強調する意味で用いる一人称であるが、〈僕〉はあえて反女性的な存在であろうとして用いる一人称である。

② 〈あたし〉は女性としての意識を高めようとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は周りの人より優れた存在であろうとして用いる一人称である。

③ 〈あたし〉は周りとの調和を保とうとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は社会通念にとらわれない自由な存在であろうとして用いる一人称である。

④ 〈あたし〉は女性どうしの連帯感を得ようとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は男性社会へより接近したいという願望を込めて用いる一人称である。

⑤ 〈あたし〉は親しい間柄であることを示す意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は公的な場で相手との距離を置きたいときに用いる一人称である。

問6　この文章における表現と内容の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 18 ・ 19 。

① 「真摯であって不真面目」といった矛盾する言い回しや、「理解よりも無理解を」といった対立する語が用いられることで、感情が両極端に揺れ動きがちな裕生の内面が生き生きと描写されている。

② 「状況が許せば裕生は泣きたかった」のように主として裕生の心情に焦点をあてて描かれているが、「そんな者どうしが友情を結び合えるものだろうか」のように別の視点からも描かれ、人物像が浮き彫りにされている。

③ 「硝子の触れ合うような音」や「夢の前に立ちすくむ」などの比喩的表現が多用されることで、登場人物の繊細で鋭敏な性格が鮮やかに印象づけられている。

④ 人物の容姿や行動の描写が少なく、「自己陶酔のうねり」「抹消を試みる」などのような観念的な言葉が多用されており、登場人物の心の動きが具体的に描き出されている。

⑤ 冒頭の詩では「ぼく」が各行の初めに置かれて強調されているが、以降の文章では「ぼく」という一人称より、女性であることにこだわっている裕生と尚子の姿が表現されている。

⑥ 会話文中に「……うん。泣いた、僕」のように「……」が使用されることで、裕生と尚子の会話に余韻が与えられ、二人が徐々に親交を深めていく様子が細やかに写し出されている。

第3問

次の文章は、木下長嘯子『うなゐ松』の一節である。筆者(翁)の十七歳になる娘は四月から病の床にあり、回復の兆しも見えないまま、新年を迎えた。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点　50)

昨日といひ今日と暮らすほどに、いつしか年も返りぬ。睦月は事立つとて(注1)、人ごとに気色異なる装ひども響きののしれど、この人のいとどなやましく、うたてあれば、耳のよそにて、「いかにせん、いかにせん」と(ア)あから目もせず、つと添ひつつ嘆くよりほかのことなし。軒端の梅の、かつ咲きそめたるを、女の童折りて、「君ならでは(注2)」と見せたりしかば、顔近く引き寄せ、「うれしげにも咲きたる花かな。色よりも香こそあはれなれ。我はかく、今日明日とおぼゆるを、げにこの世のほかの思ひ出これなら a んかし。桜はまだしくて見ざらんぞ口惜しき」など、A思ひ入れたる顔のにほひ、あらぬ人なれど、さすがになつかしからずはあらず。

如月の中の五日にや、いまはの際と見えし。たれたれと人あまた呼びするゑ、つゆの形見も置かんと、手馴れし調度、何くれとはかなきもて遊びまで、数々に取り出で、似つかはしくそれぞれにと配りつ。久しく宮仕へ(注3)しうなゐの近くあるを見やりて、戯れながら、「日ごろはとかく苛み、遊びがたきにせしを、憂くもむつかしくも、さぞ思ひつらめ、されど我なくは、『いづちおはしけん、あはれ』と偲ぶ時もあらんかし」と言ふを、聞く人みな肝魂も消え失せぬ。(イ)いかなる岩木もえたふまじく、上中下声をあげて等しく、さと泣きけり。翁と母、手を捕らへて、呼び生け呼び生け、「なほ言はまほしから b んことあらば、のたまへ。心のうち晴るけやらぬは罪深し」など言へば、うちうなづき、「我をば煙となし給ふな。それなん心にかかる。先立ちて二人の親に嘆かせたてまつらん心憂さ、黄泉路もやすくは行きやられじ。また病ひ少し緩みある折々は、辞世の歌、心にかけしを詠みおかず成りぬると、姉君の(ウ)ただならずおはして、近きほどに生ませ給へらん稚児の、めづらかにをかしからん顔つき見ずなりなん、いとど残り多かる。さならでは何の思ひおくことあらん。かまへて亡骸を損なはでをさめて c ん。B もしたがひもぞする」とうしろめたげなり。「さればよ、心やすくおぼせ。この山の外へは出ださじ。塵灰ともなさで、つねに君だち具して遊

ばしつる挙白堂(注4)のそこそこに葬るべし。翁、物学びうち休むかたなれば、なくてもわが傍らは離れじ。苔の下にもさ思ひ給へ。遺言ゆめたがへじ」と誓ひ言へば、喜びて、「願ひ、今は満ちぬ」と手を合はす。ものなど言ひ止みて、つゆまどろみ入りたるに、いささか気色直りて蘇りぬる心地しながら、なほ頼むべきものにはあらず。

四、五日ありて、初桜の面白きを人のもとよりおこせたるに、とく、ゆかしがりつるものを見せ**d**んと、花瓶に挿しおきたれば、うちながめて、「**C**はや咲きにけり。春のゆくへも知らぬ間に」と、言の葉ごとに偲ばるべきふしをとどめ、はかなき筆のすさみにも、あはれなることをのみ書きおけるは、長き世の形見にも見よとなるべし。つひに弥生の中の五日、浦島が子(注5)の箱開けしくやしさ、何にか似ん。遺言たがへず、かの堂のうちにをさめ、跡とふわざなど営むを、とまりて見る老いの命、返す返すつれなし。

(注)
1 事立つ――普段とは違う特別なことをする。
2 君ならでは――「君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(『古今和歌集』春上、紀友則)を踏まえている。
3 宮仕へしうなる――筆者の家に仕えてきた子ども。
4 挙白堂――京都の東山にあった筆者の別荘。
5 浦島が子の箱開けし――「くやしさ」という語を導くための修辞。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 20 ～ 22 。

(ア)　あから目もせず 20

① よそ見もしないで
② 泣きはらすこともなく
③ 一睡もしないで
④ 注視することもなく
⑤ 周りの目も気にしないで

(イ)　いかなる岩木もえたふまじく 21

① どんな強情な人も、我慢できなくて
② どんな頑強な人も、我慢できそうになくて
③ どんな薄情な人も、こらえることができなくて
④ どんな非情な人も、こらえられそうになくて
⑤ どんな気丈な人も、こらえきれなくて

(ウ)　ただならずおはして 22

① みごもっていらっしゃって
② 特別に喜んでいらっしゃって
③ 病気でいらっしゃって
④ 悲しんでいらっしゃって
⑤ 高貴な身分でいらっしゃって

問2 波線部a～dの「ん」の文法的意味の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23 。

① a 婉曲(えんきょく) b 推量 c 勧誘 d 意志
② a 推量 b 婉曲 c 勧誘 d 意志
③ a 推量 b 意志 c 婉曲 d 勧誘
④ a 意志 b 婉曲 c 勧誘 d 推量
⑤ a 婉曲 b 推量 c 意志 d 勧誘

問3 傍線部A「思ひ入れたる顔のにほひ、あらぬ人なれど、さすがになつかしからずはあらず」とあるが、この部分の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① 花に思いをめぐらせている娘の顔の様子は、病気のためまるで別人だけれども、やはりいとしく思わずにはいられない。
② 死を意識して悲しみに沈んでいる娘の顔の様子は、命のない人のようだが、それでも心がひかれずにはいられない。
③ 女の童を思いやる娘の顔色は、病気のせいで以前と同じ人とは思えないが、やはりかわいいと思わずにはいられない。
④ 梅の花の色香を深く味わっている娘の顔の様子は、病人とは思えないけれども、やはり心配せずにはいられない。
⑤ 過去の思い出にひたっている娘の顔色は、病気のため本人でないようだが、それでも慕わしく思わずにはいられない。

問4　傍線部B「もしたがひもぞする」における娘の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 25 。

① 火葬により生前の姿を失い、煙となってこの世から消えてしまうことが何よりも気がかりだという気持ち。

② 慣習に従わなければならないとはいえ、親がわが子を火葬するという行為はやはり恐ろしいと思う気持ち。

③ 両親に自分の亡骸を火葬させ、そのうえこの山荘の外に墓を設けてもらうのは申しわけないという気持ち。

④ 火葬してほしくないという願いを告白したものの、それが両親をさらに苦しめてはいけないと思う気持ち。

⑤ この世に思いを残したまま火葬されると極楽往生できなくなると知って、心配になってきたという気持ち。

問5　傍線部Cの「はや咲きにけり。春のゆくへも知らぬ間に」は、「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり」（『古今和歌集』春下、藤原因香（ふじわらのよるか））という和歌の表現を踏まえている。これを参考にして、娘が言い表したかったことの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 自分が気づかない間に桜が咲いていたのだという感慨と、春霞（はるがすみ）がたちこめるころが命の限りだと言われていたので、春の移り変わりを最後までは見届けられないだろうという思い。

② 心待ちにしていた桜が咲いていたのだという感慨と、病気のため部屋にこもっているので、春の移り変わりを肌身に感じられないまま、やがて命を終えてしまうだろうという思い。

③ 桜が咲いたことにまったく気づかなかったという失望と、その桜が春の移ろいとともにやがては散ってしまう運命にあるのに、それを知らずに咲き誇っていることをあわれむ気持ち。

④ 自分が気づかない間に桜が満開になっていたのだという驚きと、今を盛りと咲き誇っている桜もやがては散ってしまうように、若い自分も次第に年老いてしまうだろうという思い。

⑤ 自分が気づかない間に早咲きの桜が咲いたのだという驚きと、暗い気持ちで部屋に閉じこもっていたため、心待ちにしていた春の到来にもまったく気づかなかったことを悔やむ気持ち。

問6　本文の内容に最もよく合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① もともと親しい仲ではなかった女の童と娘が交わすほほえましいやりとりは、いつも周囲の重苦しい気分を和らげていた。しかし娘の死後はそのような何気ない場面場面が、筆者にはかえってつらい思い出として蘇(よみがえ)ってきた。

② 娘は死が目前に迫ったことにとまどいながらも、その心境を古歌を踏まえた典雅な言葉で巧みに表現してきた。そのような優れた素養を持ち合わせながら世を去らなければならなかったことが、筆者には何にもまして残念に思われた。

③ 娘は臨終の間際に、気分がよい時に辞世の歌を詠み残せなかったこと、姉の子供の顔が見られないだろうことが心残りだという内容の書き付けを残していた。娘の死後それを見出(いだ)した筆者は、あらためて運命の無情さを感じた。

④ 花や周囲の人々へのこまやかな愛情を最後まで失うことなく、娘はあまりにも若くして亡くなってしまった。それだけに、娘の言動の一つ一つがかけがえのない思い出として蘇り、筆者は後に残されたわが身をむなしく感じた。

⑤ 娘は長い闘病生活のために少しやつれて見えることもあったが、その言動には少女のあどけなさが残っていた。それを思い出すにつけても、筆者は自分の余生と彼女の命とを引き替えられればよいのにと思わずにはいられなかった。

第4問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）（配点　50）

胡子(注1)夜臥、有鼠嚙于案、其声磔磔(注2)然。胡子懼鼠之傷其書也、乃暗投以杖。杖不能中鼠。鼠暫止而復作。遂(1)命童子(注3)起而逐之。鼠稍竄去。及童子就枕、鼠復(イ)嚙不已。時貍奴(注4)乳別室。胡子度(2)鼠之不能去也、於是命童子取貍奴置臥内(注5)。

A

B

C

由是向之磔磔者寂不聞矣。噫、人非不霊於鼠、制鼠不能於人而能於貍奴。貍奴非霊於人、鼠畏貍奴而不畏人。然則彼各有職也。君子居其職者、亦尽其職而已矣。

（胡儼『胡祭酒集』による）

（注）1　胡子――この文章の筆者胡儼の自称。　2　磔磔――鼠がかじる音。
3　童子――召使いの少年。　4　貍奴――猫の別称。　5　臥内――寝室。

問1　傍線部(1)「遂」・(2)「度」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ・ 29 。

(1)　28　遂

① つひに
② すでに
③ さらに
④ ことに
⑤ ただちに

(2)　29　度

① おそるる
② わたる
③ はかる
④ みる
⑤ うれふる

問2　波線部(ア)「復作」・(イ)「復嚙」とあるが、その前後の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 30 ・ 31 。

(ア)　復作　30

① たとえ当たらなくても、しばらくは鼠がかじるのをやめるので、胡子は再度杖を投げつけた。
② 投げつけられた杖をうまくかわすことができたので、鼠はただちに以前のようにかじり始めた。
③ 杖が当たらないとわかると、鼠は逃げることをやめて、すぐにまたかじりだした。
④ 杖を投げつけられて、鼠はわずかの間かじるのをやめたが、ふたたびかじり始めた。
⑤ 杖は一度目は当たらなかったが、鼠が動きをとめたのをねらって、胡子はまた杖を投げつけた。

(イ)　復嚙　31

① 鼠はようやく童子の追及から逃れたが、童子が寝たふりをすると、また何かをかじり始めた。
② 童子に追われた鼠は枕のかげに隠れたが、童子が枕に近づこうとすると、童子にふたたびかみついた。
③ 鼠はしばらく様子をうかがっていたが、童子が寝つくのを見届けると、また童子の枕をかじった。
④ 胡子は童子に鼠を追い払うよう命じたが、童子は眠ったままだったので、鼠はさらにかじり続けた。
⑤ 鼠はひとまず身を隠していたが、鼠を追い払っていた童子が寝ると、ふたたびかじりだした。

問3　傍線部A「命二童子一取二貍奴一置二臥内一」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① 童子が胡子の猫を受け取って、寝室の中へ閉じ込めた。
② 童子が胡子の猫をけしかけて、寝室の鼠を捕まえさせた。
③ 胡子が童子に指示して、寝室の中で猫を捕まえさせた。
④ 胡子が童子の猫をけしかけて、寝室の鼠を捕まえさせた。
⑤ 胡子が童子に指示して、飼っていた猫を寝室に移させた。

問4　傍線部B「寂不レ聞矣」という表現から、この夜の出来事は結局どのように終息したことがわかるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① 鼠の鳴き声がしなくなって、胡子はかえってさびしくなった。
② 鼠がいなくなって、胡子はようやく安眠できるようになった。
③ 鼠を追って猫もいなくなり、やっと別室は物音がしなくなった。
④ 鼠も猫も眠ってしまったので、童子も安心して床に就いた。
⑤ 鼠のかじる音は聞こえなくなり、猫も別室から出て行った。

問5　傍線部C「人 非レ不レ霊ニ於 鼠、制レ鼠 不レ能ニ於 人ニ而 能ニ於 貍 奴」とあるが、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 人間は鼠よりも賢くすぐれているのだが、鼠をおさえることができるのは、人間ではなくて猫である。
② 人間は鼠ほどすばしこくないので、猫を利用するのでなければ、鼠を追い出すことができない。
③ 人間は鼠よりも知能が発達しているのだが、猫を飼いならすようには、鼠を飼いならすことはできない。
④ 人間は霊長類の最たるものなのだが、現実に鼠を支配することができるのは、人間ではなくて猫である。
⑤ 人間は鼠ほどずる賢くはないので、猫を捕まえることはできても、鼠を捕まえることまではできない。

問6　筆者の主張を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 鼠を捕まえる猫も、鼠のいる部屋に置かなければ役に立たない。君子は、それぞれの能力と限界を見きわめて、適材を適所に配置するものだ。
② 人には人の、猫には猫の、それぞれ能力や本分がある。君子は、自分の役割をよく心得て、それを十分やりとげるように努めるものだ。
③ 鼠を遠ざけるには、杖を投げるよりも猫を用いたほうがよい。君子は、手段とその効果をよく見きわめて、最も効果的な方策を選ぶものだ。
④ 杖には杖の使い道があり、鼠を追い払うために使うものではない。君子は、道具の使い道をよくわきまえて、適切な使い方をするものだ。
⑤ 人間は、他の動物の上に立つ存在である。君子は、それぞれの動物の特性を活(い)かして、その能力を十分に発揮させるようにするものだ。